



松平定遠

14

~~P  
273  
4~~

逍遙文庫  
文庫 6  
1293  
4



後本寫卷袋四之書目録

伏犧之聖像

叙畫之源流

精湯逢王母書

平舞文婦登仙之書

吳郭帝王之像

附黃帝制冕旒衣履

禹王治洪水書

純馬出現之書

女媧氏征共工氏書

黃帝滅蚩尤書

附指南車始之書

倉頡制字書

棟鼓之書

黃龍負禹王舟書



二龍降新門  
 伊尹之肖像  
 雲中子之像  
 文王受飛熊湯

并 劉累醢於肉  
 傳説之像  
 呂尚釣磻溪湯  
 并 文王始太公望

繪中寫室袋口之卷

孟河龍子也現一危義氏河圖之  
 古者繼人氏乃女媧姪之  
 長子也長三丈六尺首蛇之  
 天親俯則法地親網罟之  
 養之危厨之充乃民大之  
 下龍子現之形龍小似之  
 兩翼也其之也之也之也  
 帝之也之也之也之也之  
 朕天下之治也之也之也  
 言守之也之也之也之也  
 流舞之也之也之也之也  
 之用也之也之也之也之  
 四卦之也之也之也之也

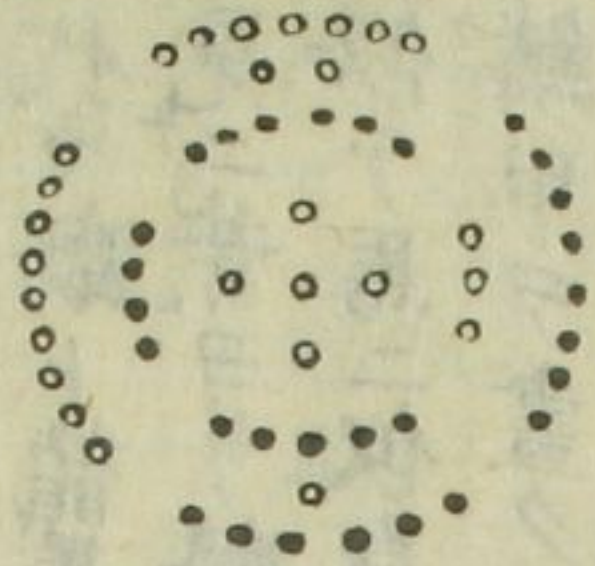
文庫6  
1263  
4

太昊帝伏羲之聖像



伏羲畫卦像多圖故除茲上古人相荒  
麻綿ノ類ナク衣物冠鳥等定ナレ故ニ木  
葉蒲芦獸皮鳥羽ヲ穿ト也今圖スル像ニ多  
本文ノ文ニヨツテ帝ノ像ナレハ少ノ替アリ

河圖



新又貌のわ  
落臺の曲面  
ののり  
龍の仕立



龍の仕立  
守佐ノ聖の  
像ノ圖を下げ竹圖純の形の辨  
趣々面純おれと駢のわく身お旋色あり

叙畫之源流  
 畫ハ伏羲ノ河圖ヲ得八卦ヲ畫タラフヨリ初ル卦ノ象畫也時  
 與鳥ノ形ヲ畫テ書畫同體舜繪ヲ明ニシ至フ畫ハ成教法助入倫  
 窮神變與六籍同功ト云リ古人ノ言ニ宜物莫大於言存形莫善  
 於畫此之謂也又曰繪ニ畫圖寫ノ三象有畫ハ画ノ惣名画ノ草也  
 圖ハ画ノ行寫ハ画ノ真也又曰畫ハ是有形ノ詩也異名ヲ無声ノ詩  
 トモ名ク繪ノ神ナルコト風雲雨雪ヲ寫シ四時ノ景候萬物ノ形ヲ  
 目前ニ出シ五里ヲ尺寸ノ間ニ象ル不見人ヲ寫シ道ノ守トス是聖  
 人ノ初至フ故也亦曰五聖ノ像ヲ畫時ハ必龍馬ヲ畫ク俗麒麟ト云非  
 麟龍馬也伏羲畫卦タラフニヨル故也亦孔子四亞十哲連圖六麟ヲ畫  
 代々麟ト龍馬ト形ヲ畫誤ル予三才圖會孔門ノ書其外諸書ニ出ラ  
 見ニ昔ヨリ麟ト名形ハ龍馬也圖會云昔伏羲ノ時孟河ニ龍馬出龍ニ  
 似テ馬ニ似身ニ麟甲翅有長八尺背上一八卦ヲ負ト其圖龍首馬形  
 鱗甲ヲ畫ク又一書ニ龍馬黃河ニ出身ニ旋毛有河圖是也ト云ハリ  
 龍馬ニ角火勢鬃鬣背鬣ヲ畫ハ龍ニ似ト云文勢ニヨツテ畫モノ也

共工氏礼と起一女婿氏

共工氏礼と起一女婿氏  
 女婿氏ハ伏羲ノ妹ナリ賢女ナレバ伏羲帝ノ後群臣  
 推テ帝位小節ナリ加ニ雲ノ鬚花ノ形帝位と云成ヤの  
 ありたれバ恩無キと云云ト云ハリ一雨徳侯共工氏  
 康回といハ者あり深ク卦ニ成時ハ徳神に通ズ  
 富樂ト好ミ女婿氏ハ愚慕一々礼トモ女官使たすさる由  
 通ニ係報シテ礼ト作ト女官相室氏央室氏ト云先漢書ニ  
 大ニ我ハ康回幻術ト云ハ河水上ニ融里女官人ナリト  
 失ハ康回多ト絶ルト花鳥ノ一相室央室ハ水ニ浮リ道  
 通ズハ南オ小南オの使侯ハ祝融といハ老人能天文地理極  
 多術康回ハ揚リタリ女官の軍利ありさる事と揚リ山上  
 小節ノ技ト云テ花報ハ一由官軍卷トのる康回也祝融  
 と稱殺さんと云テ殺ス時祝融忽白霧又化一飛去再祝融  
 三万余路ト云ハ康回ト夷亡ト天下大ニ治ト云ん



共工氏波と廻り祝融と射る圖

寫真袋四

精衛公を西王母と遇す  
 精衛公は炎帝神農氏の所女なり生得美姿一七歳  
 神農真小圃月花と着るは容貌あり一日居を以て  
 一々回盛に再々美くは時ありて枝と輝と人生金不  
 何とされん推そ航法改むとてお命んやあれ長生  
 不死の乃りやと尔時中より車お輝くして  
 母形と現し告く曰公を基乃といあはれん  
 次日又母に告て救中侍女と申し舟又より東海あり  
 遊ふ半陰よ楽茶といふ時あり公を慮の美男と見て  
 遊ふと生し道公精梅の家子蓬萊文よありとありつ  
 死し候とあるは鳥帝に西山より木石成脚来て東  
 海と懐んとは是れ精衛公と云とく

精衛公を  
 西王母と  
 逢ふ



黄帝與蚩尤涿鹿之戰

黃帝指南車之制

博古二曰北山ニ石アリ磁石ト云  
 鐵針ニスリ付テ水ニ浮クルニ針  
 水上ニテ南北ヲ指ス黃帝コレヲ  
 用ヒ指南車ヲ制スト云  
 指南車ハ今ノ磁針ナリ人形ニ  
 ノ作ナリ

磁針



雲霧  
 起



黃帝



黃帝滅蚩尤并始於南車之儀  
炎帝神農之代の帝と稱すと云ふ時は高て蚩尤と云  
逐良悪と雖もして礼儀具し徳侯と表すのりて天下を  
撫と帝不徳とて割ると能らぬ故也とて海康(此)  
久蚩尤の都に入位し帝と稱して海康を攻て九圍と云  
龍の卵一食に炎帝は後裔小有熊玉子軒轅と云  
人あり徳とあらめて人民を服し二万路の兵を率ひ帝と  
援ひ蚩尤の大軍へ突くと入蚩尤を討つて擒し嵩とて軒轅を  
と百餘合蚩尤を打負て之をらう忽妖術を放し雲霧を動  
味方前後とこして後軍と相擾又保と出し南車を造軍士  
と宗再ひ戦ひ挑ひ雲霧又霧を起し九龍南車を立て欲陳  
よらんと進たれし味方軍と礼と終は蚩尤を滅し天下  
乃氏を逐とて帝と稱すは是れ黃帝と稱すなり

年葬生婦登仙の事とて月夜はあり

帝堯乃時憂歎ひて人伐言ふるを平葬に命して帝  
年一也於平葬の勅と承り我家とて是と制と去る葬  
年を嘗免美しきもは種と好し捨る今友史他史出  
より短ふゆへ深固小く独り是れ慕て獲得とて是の  
杯とつとむいりやと瘞てと痛くもは徳と年葬と  
乃の或は美に葬後來と茶丸一顆と与ると刃と  
側と見れど實小丸茶ありたり妻ふと飲小杯の我  
りい死する中んとていひて徳と慕乃の時と徳と  
漸く平の法史乃葬實は後來と彼妻のやと史傳  
茶年山に入ると字いり時西王母に不老不死の茶丸  
授まり是れ定とお急の感とありなりとて試み是  
根て儲とけ余の下に生長し死と捨るとして試み是  
存と書し醫くと飛て我子のりる葬と承その衣と  
つととらむとそり小月宮に入る書し婦娥とあり葬と

昇史婦月宮殿小登る湯



唐朝李義山詩

雲母屏風  
風燭影深  
娥應悔偷靈藥

長河漸落  
曉星沉  
碧海青天  
夜夜心

此詩弄之故事也

圖版療後妻解



軒轅氏治兵戮蚩尤而天下歸之名号黄帝曆箕律呂宮室書契章服  
 畢具黄帝冕旒衣服ヲ制ス冕八冠名旒八金銀珠玉七寶ヲ小毬（實繫之）  
 冠ノ前後各十二垂ル是ヲ十二旒ト云玉數モ十二アリ珠八貝ノ々（眞珠磬磬也）  
 玉ハ水晶瑪瑙瑠璃玻璃琥珀琅玕珊瑚樹也。旒ハ玉眼覆テ諸邪事見ニ  
 ジキ為也亦冠ノ左右ニ鳴鈴ヲ垂テ玉ノ耳ヲ塞グ是ヲ韃纒ト云諸臣諛  
 言惡事ヲ聽ニジキ為ノ器也圖ヲ見テ可知。有虞氏帝舜衣服ニ十二章  
 フ制シ其象形ヲ衣ニ畫裳繡其色品ヲ彩タフ是ヲ繪ト云彩色ノ始也

二十章  
 衣 日月星辰也  
 裳 藻火粉米黼黻也  
 畫 宗彝龍虎也  
 繡 虎豹也  
 文 龍虎也  
 日 左  
 月 右  
 星 辰  
 辰 也  
 背 後  
 不 見  
 龍 左  
 虎 右  
 藻 海 草 也  
 火 火 也  
 粉 粉 也  
 米 米 也  
 黼 黼 也  
 黻 黻 也  
 龍 龍 也  
 虎 虎 也  
 宗 宗 也  
 彝 彝 也  
 龍 龍 也  
 虎 虎 也

方心 胸有象也  
 方也人心方寸間有義ニトル是鉞物ヲ曲領ト云形曲クヒラメクリ後ニ結垂色白  
 腹覆 紉下ニ垂ル紳 前ニサクル衣裳ノ權ナリ悉ク見ヘタリ 佩ニ 腰ノ兩脇ニ垂ル珪瑠璃瓊瑯黄色白又五色  
 左 右 有 紳 四書天全卿黨ノ篇ニ見ヘタリ 佩ニ 是ヲノスルモノヲヤウキト云色白綠

古人ノ衣色玄シ天ノ色ヲ象ル裳黄色地色ヲ象ル彩ニ衣ヲ澁色ニス 黄赤黒  
 又コシヤウニテ空色ニス今制ハ衣色ヲ黄エニテ塗リ朱墨ノクニ有裳ヲ白緑  
 ニス手ハ左ヲ上ニス玄珪ヲトル象ニ劍形ニレ上ニ三星ヲ畫シ色白緑也

十二旒



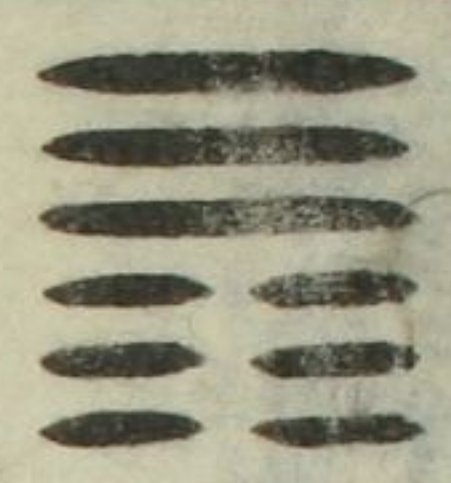
冕板  
 後白 直亮  
 前赤

朱墨仕立

寫錦代衣四



倉頡四自生軒轅時已建左右史以記言動頡誦誦實當左史任世  
 人減稱字從其制始因鳥跡而作字為萬世文字之祖蓋亦因其文  
 而增創耳耶謹按伏犧時已有書契



乾天卦坤地卦伏犧氏因河  
 圖畫八卦手  
 心八字而象  
 畫也是書畫  
 之初也



鳥跡之象  
 倉頡鳥足  
 形見テ造  
 字是字畫  
 始也此後字  
 象八體トナル



馬  
 尾也  
 倉頡馬  
 見テ象レ



幡信ト云字也



今之未字  
 象八體トナル

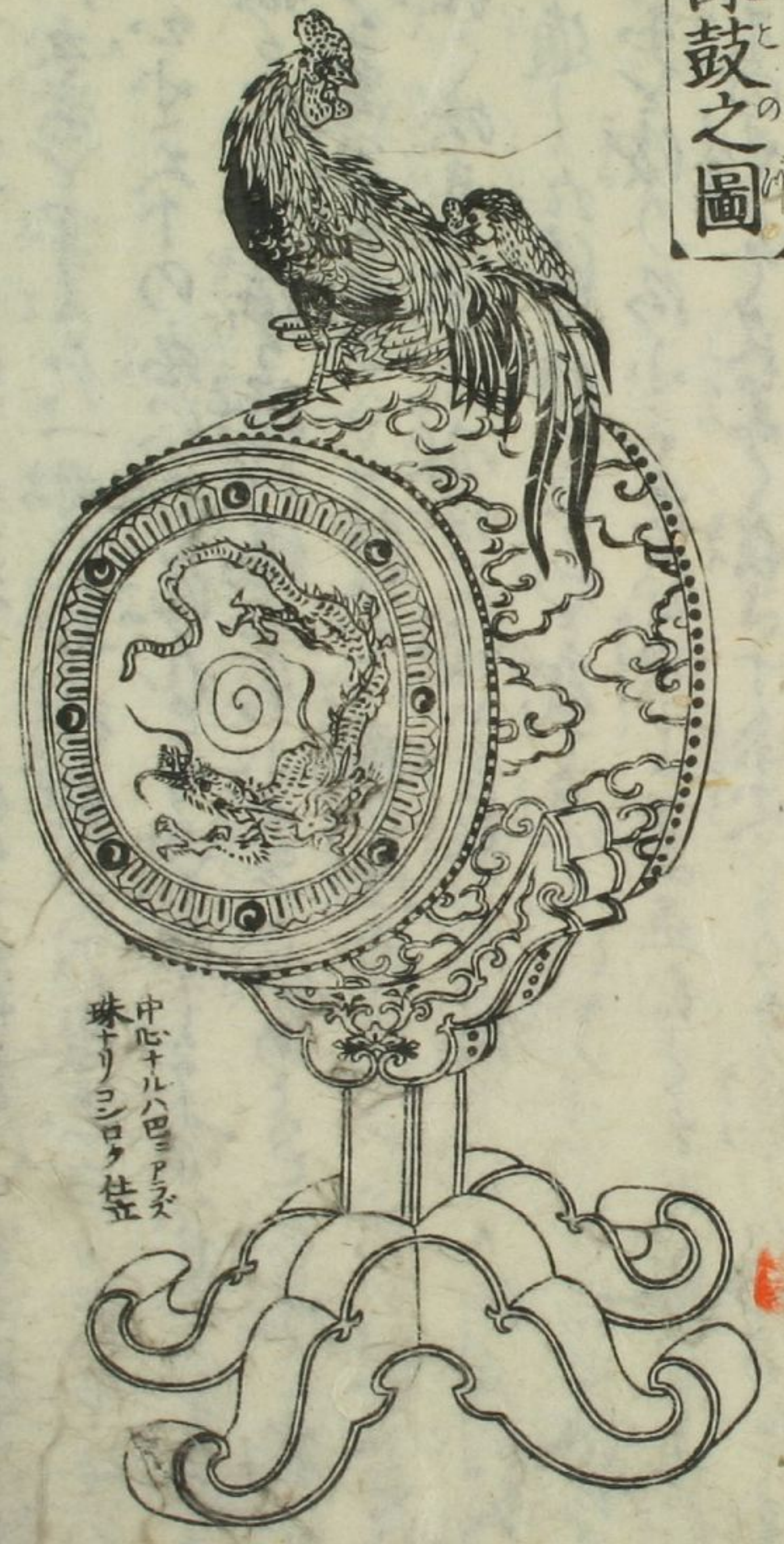


敵  
 敵  
 敵

圖會曰按字學之體六曰鳥書在幡上書端象鳥頭者則畫流漢末  
 大司空甄豐按字體有六其六曰鳥書即幡信上蟲鳥形書幡信云  
 八天字ノ幡名也其幡二古文字ニテ幡信ト書

堯の神代世も敢ての教ありき  
堯帝の帝徳の功ありて聖中して恭く克復徳の功あり  
なほ九族朕小睦く黎民時雍りて富天下に成り  
天子は位をたれど御方と踏んずるは等しき  
履太階三等蒲草を席して衣服は舟車不飾美事  
儉約しついで財用の費ることなれど年貢のゆるぎなくして百姓  
の恵むこと一民の仇をたれど我は徳を以て民を  
乃て徳を以て我をたれど我は徳を以て民を  
あるは徳を以て我をたれど我は徳を以て民を  
敢て民をたれど我は徳を以て民を  
成て民をたれど我は徳を以て民を  
民は若く憂ることありて我は徳を以て民を  
帝は徳を以て我をたれど我は徳を以て民を  
たれど我は徳を以て民を  
は治るる徳を以て我をたれど我は徳を以て民を

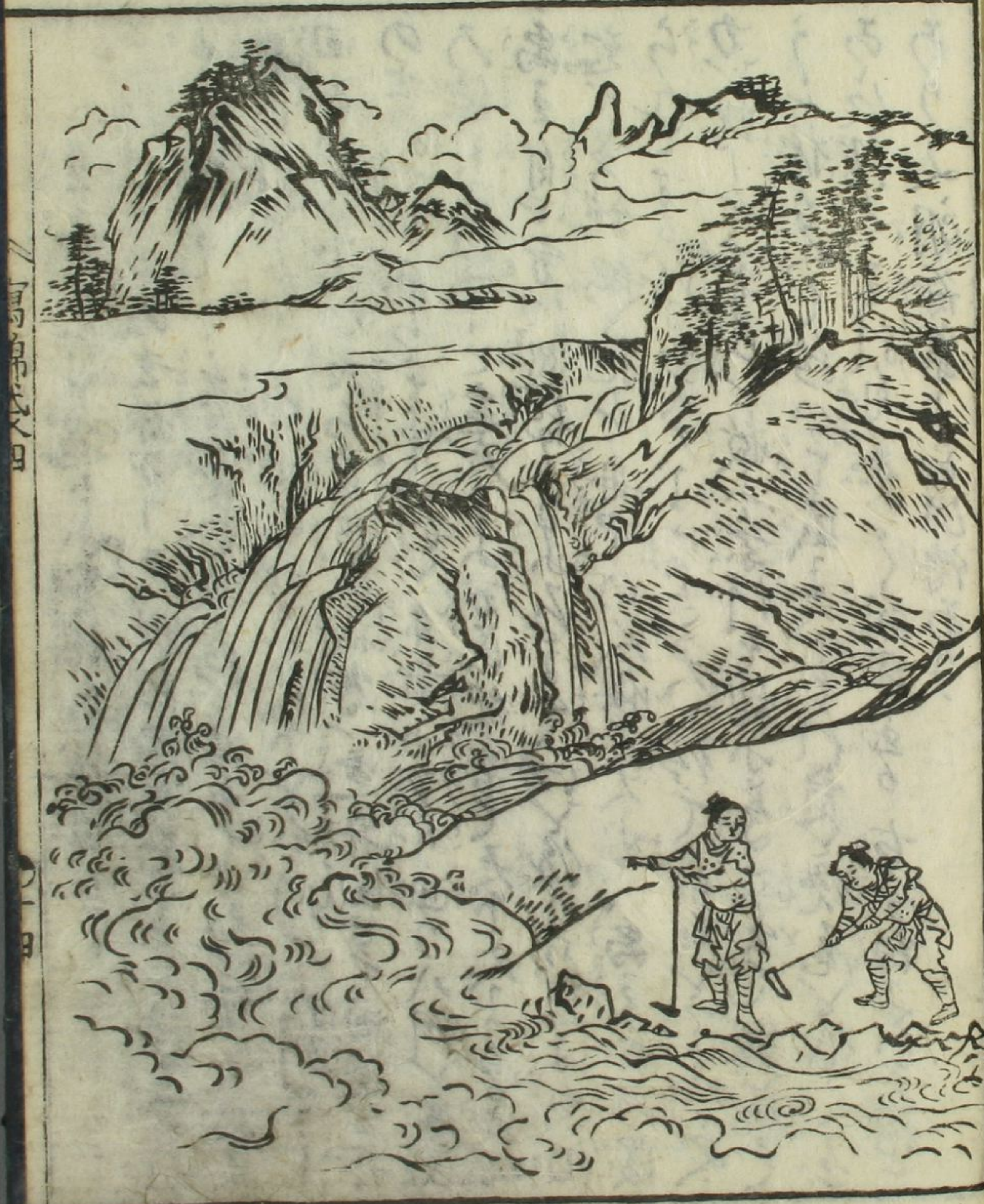
諫鼓之圖



中世ナルハ四ノ一  
珠ナリニシロクナ

育りいふも重き 朝海集の傳教書  
文のどくやば麻ありて也堯王の古今すれはる聖王の徳を  
臣にたれども帝をたれども思ふは鼓の聲を以て民を  
とて門外にたれども思ふは鼓の聲を以て民を  
うは命をたれども思ふは鼓の聲を以て民を  
鳥のたれども思ふは鼓の聲を以て民を





山勢如削



山勢如削

夏島王に過る小舟被り舟屋事

大島、青島の玄孫より天性敏給克勤て其徳遠く  
 仁親の御徳を信じて洪く治めて大お切あり故に  
 舞の祥より文く帝位に仰さ天下を分けて九列に  
 田去るより下流たら貢税の式度と定井田とそ田畠と井  
 の字はやく分らそ中一川と年貢小なりゆり八川と農民  
 乃徳用の中一と定たまふ万民親樂て天下大は治る或時  
 禹王自ら方に巡狩するなるそに後り治るは忽彼  
 起て黃龍船に托と舟中の人懼て大お笑禹王舟の覆  
 らんとする候て大は嘆き天に告げて其命とす小文  
 かゞ賜て弟民を救ふ奈何と能小其文とて、  
 うら振るくと話ひを感よらそ其首と尻尾と低く去  
 めに控く玉れ舟恙なく所小ゆり古今語よ其徳  
 あり又訓海集よとい侍あり





劉黑龍肉と醜はする事

夏禹より十匹の帝と孔甲と云居林と好い  
 事と改道正しり一日和門の外に雄雄二匹の  
 然天より降て林の帝を右面と群長小官蔡史と  
 いふ臣奏して曰これ右祥の瑞あり宜しく是を養て  
 おのつて去つたすくと帝奏は誰いどあつら劉累と  
 云は小宣して是を養い劉累は飲食と酒わして  
 養書くおこつてり或時雌龍くらまら死しり  
 劉累あつて醜して帝にそまつる孔甲是と食するに  
 も味をかはつて美なりたれと再び劉累に雄龍と醜  
 して献るべしと勅定あつた劉累あつて自記とる  
 とも醜おもひたれ生る龍いりて近付殺とる  
 ゆん中とたよおとるて表中の逃去帝いゆとす大よ

怒り武士二百人小命りて醜と投しむ武士等養龍乃  
 け多と放乾し矢と投て是と射り龍はく雲に遁る  
 物なれん男と龍しててび揺げの忽をかく曇る風  
 とさうり小吹降く雲と半空と騰し三百人の武士と池  
 中に捲入雷電三日とてゆと帝是より病と交く逆器  
 趙弱保して曰四雷の物龍より雲の中龍出は龍の小太に  
 雲化し龍騰量測すと故小降降之際雷電風雨を神是と助  
 雲氣晦暝山嶽形と失ひ江河泛溢汚濁震蕩龍の是に  
 近付んや若授書すとて牛ると是かたは必を討て或ひは  
 異物龍の形は青くあつた故これと書すとゆら死命は  
 伝せんと或曰龍は三百の武士龍のくあ池中に捲入はと  
 龍と此やう教人が曰是は龍と云る哉とてくのおく勢と書り  
 文勢と云の也今畫この龍と多る小田是に火を画と勢と寫筆勢也



寫金銀四



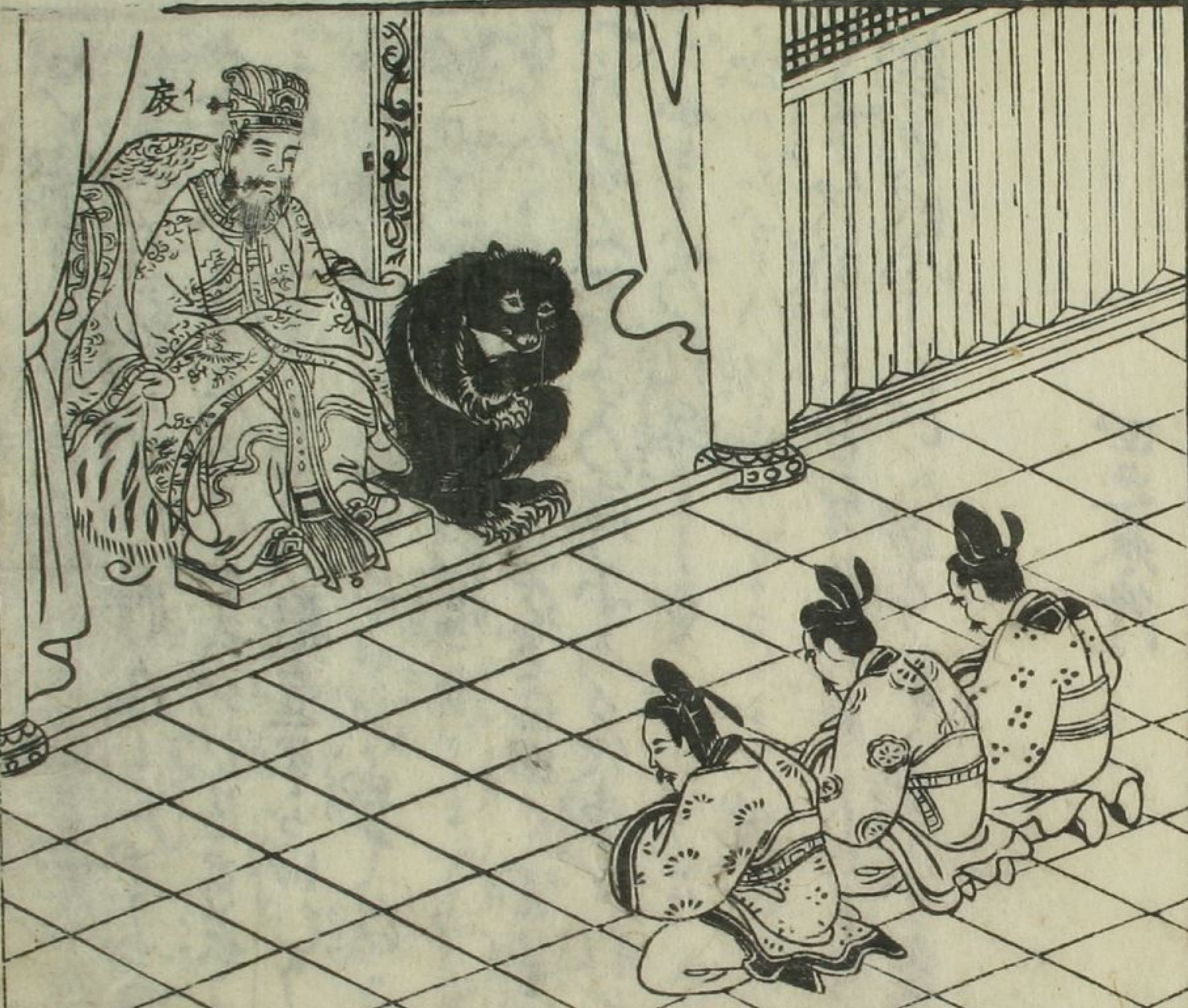
殷村に於て己の寵愛 隆盛  
と譽て政事の老いし  
雲中子云ふ士分野  
妖邪のり怪く照麻  
白く是をなれぬ  
乃老翁帝女あり  
雲仲子の目言け邪  
除く玉氏と救へ  
和山は八十年の松木  
とてつ川の叙ゆ  
付まに敵を今妖邪  
返さ云べしと主  
己が白髪いより  
く叙翁と云れん  
是の石中子邪術  
おのりそと別木  
悪月くに地



雲仲子

左公登姓八呂名尚と云  
く天文地理と好め  
軍法と達一聴の戯者  
かれとて時よ遇ふ極  
く食一殷の村まゝ  
文王の地へ往り  
之の地は怪物と  
後り道と如く仕  
おのり石の富貴と  
を清く子い  
と云ふその貪  
何と云ふ高の  
八十にあり  
故等と安樂

今もあつてく時を待たずして毎日海濱におきて魚をつる一  
 日妻も成持行松は蟹貝の尻に魚一尾をかへて人へ家  
 魚と物たつらふりおれぬ勢のやうにとて物を争ひて  
 られぬ物と曲と起す計りて餅とや書懸て曰くまてハ  
 御力にやみとの下と時又過るるこころいけり物と刀をいけり  
 の長時ありてとあれり里く離れし旧里より老翁とを  
 安くと平と云品高の回我れ死をたぬと起て料をさゆと  
 子と好まぬ直り物よかりん天命の盡る魚おれぬて生  
 との平又お水の方にあつて寺塔を雲のり三年の内に  
 王候あり我と逢ふも時海と雲たかりしめ今もその  
 困苦と起すべしとてさうくはさしとてと妻とせむ  
 先小は力とに及び世よあつと云たすこと今小富貴  
 来すす我とてお老極りんとく死ぬと富貴よありと  
 との何の糸いひりあんと云品高の回我れ死をたぬと起  
 と富貴とて時海と起すべしとてさうくはさしとてと妻とせむ



用の文と一巻よ一の  
 徳と南より飛入御  
 依る小百官をか御  
 と刀のよき後群臣  
 小言たす小教宣せう曰  
 徳の良歎からん此  
 生するのハは是より公賢  
 おとほり少下座の側  
 依り右友群衆とらん  
 君のた名は相つるを  
 公よりらしと南に捕  
 して賢人成末めな人  
 文と回返かん佐佐  
 らんつらん宣生ののま  
 ひり高のそふあ  
 良病と見ても賢人の

おと強き書せし通く天下と扱めたるよに果して傳説と  
 ゆるり我公ゆめ將んどなすよりあつてはたのむて  
 文王はまららあひ文武の徳と若く東南に轉りて  
 賢人亦達するに教宣せむ白ひり湯王の伊尹と事  
 野小聘ひし時とこころいひて後よあつて我天賢と  
 心とせりあつては紫蘇とくあつてはひりたすくあつ  
 賢人は逢たまらん文王の曰く宣せむと公紫蘇とがさ  
 たりたん君子乃卿小入るに車と相て式とこりり賢と  
 う中より礼跡りりすとくすそく并成とて又禮深と  
 即りなすい昌尚にまらんを姓名成らひるを昌尚姓  
 の妻たる尚字の牙又飛熊と号すと文王のいするに飛  
 熊後に入らん人なりとて車小紫とて網よかたりるふ

四之巻終

早稲田大学図書館

011688993395